

アイヌ語で大地のことを「ウレシパモシリ」と呼ぶことがあります。  
これは、「万物が互いに互いを育てあう大地」という意味です。

野村義一

In the Ainu language, we have a word, URESHIPAMOSHIRI,  
which signifies our concept of the world as an interrelated community of all living things.



## 【専龍寺 永代経法要】

7月1日(水) 9:30 おつとめ・法話 13:00 おつとめ・法話  
【おとき12:00】

講師 蓮岡修さん(絵本屋きんだあらんど店主・僧侶)

## 【石西組同朋大会】

6月20日(土) 9:30 ~ 16:00 会場：正萬寺(美都町)  
講師 谷本修さん(静岡県島田市・敬信寺住職)

# 自然(じねん)



「大自然」「自然豊かな」「キノコが自然にはえた」というように、「自然」を「しぜん」と読むことが、今の使い方です。

意味は、「大自然」のように、山海川空といった、私たちを取り巻く環境、大地をいいます。また「自然に生えた」のように、おのずからと、ひとりでの、のように使われます。

もともと「自然」とは「じねん」とよみ、仏教の言葉であり、親鸞聖人も大切にされてきた教えです。

津和野に縁深い明治の人である森鷗外が、英語のネイチャー(nature)を「自然」という日本語を当てて訳したので、大自然のように今多く使い意味につながっているとされています。

親鸞聖人が86歳で書かれたお手紙には、このようにされています。

「自然というのは、自の意味はおのずからということ。念仏申す者の考えや行いではないのです。然はしからしむるという言葉です。これも念仏申すものの考えや行いではありません。阿弥陀如来が誓われたからです。」

難しいですが、「自然(じねん)」というのは、「おのずからそのようになっていく」というのが、親鸞聖人のとられて意味です。そして、まったく私たち一人ひとりの人間の考えや行いは、思うがままには関係ないという事になります。

親鸞聖人のおっしゃるような「自然にまかせて」という道理には、私たち人間はうなづけないのではないのでしょうか。

人としての命を終えて行くにあたっての臨終で言えば、「おまかせ」とは言いながら、「苦しまずに」「悔いなく」「病院ではなく家で」と、私自身思いが起ってきます。どこまでも、私の思いの

延長です。

また、のこされていく身としても「なぜこの順番なのか」「やり残したこと、できたこと」があったのではないかと、自らを責めたり、悩み続けずにはおれないのが私たち人間のこの身、この心の事実です。

「あるがまま」「おのずからそのようになる」という事が、どうしても受け入れていくことが出来ないのが、人間であり、親鸞聖人自身も悩み続けたのではないかと思います。

親鸞聖人は、こうもおっしゃっています。

「(無上仏という、この上ない真実は)かたちもないのですが、それを知らせようとしたのが阿弥陀仏として聞いています。阿弥陀仏は、自然ということをしらせようとするそのものなのです。この道理を心得た後には、いつもいろいろ考えてはなりません。」

「よいことも、わるいことも、身に起きたこと、口にでたこと、心に思ったこと、この現実社会に起こった事すべての積み重なった結果が今の事実です。ひたすらに阿弥陀仏の本願を信頼し、よりどころにするので、一人一人の思い行いではないから、他力というのです」

阿弥陀仏は、苦悩する存在をどうしたら救えるか、五劫という途方もなく、永い永い間考え続けたと説かれています。

別な見方をすれば、いま私たちが苦悩する原因や背景を一つ一つ確かめたら、五劫という時間がかかったと言えるかもしれませぬ。

悲しみ苦しみとともに、言葉にならない思いをかかえ、日々の一息一息をつづけたのが、親鸞聖人であったとも感じます。

# 念仏を選ばれた意味



平野 修  
(九州大谷短期大学元教授)

プレゼントというのは、自分の都合で選ぶものではなくて、相手のことを思って選ぶものですね。それと同じことなのです。仏さまが「念仏せよ」と言われたのは、「何でもいいから」という意味ではないのです。選んだという意味は、少なくとも「念仏せよ」と呼びかける相手の人のことを思って言われているわけです。

そうすると、阿弥陀如来が「念仏せよ」と言われた理由は、我々の方にあるのだという意味になります。我々の方に理由があって、「念仏しなさい」と言われたのです。仏さまの頭の中で考えたという、そんな意味ではないのです。どうも我々の方に理由があって、「念仏せよ」とおおせになられたのだということになります。

川の流が急なところがあって、ある人がそこで水遊びをしているとします。急流の中で、その本人は泳いでいるつもりで、水遊びをしているのです。でも、外から見ると、どう見てもその人は

流されていて、次は滝壺に落ちるぞ、という危ない状態にある。それを知っている人が、一本の棒をその人の前に出したとします。それは、その相手の人が流されていて、とうてい這い上がることができない、もう結末は見えているということで棒を出したわけです。しかし、急流の中で泳いでいると思っている人に見れば、「何でこんな邪魔な物を出すのか」と思うかもしれません。「目を突いたらどうするのか、泳ぎの邪魔じゃないか」というふうに考えたとします。すると、これはすれ違いになります。

「念仏せよ」というのも同じです。自分の力で急流の中を泳いでいると思っている我々にとっては、「邪魔なものを出して」というふうにしか思うことができません。でも、実は我々は急流に流されていて、結末はどうなるか、仏さまには本当に見え尽くされているのです。だけど、本人はそのことを知らないでいる。ですから「念仏せよ」と言われた。なぜそう言われたのか、その理由は我々の方にあるということです。

『本尊の意義をたずねて』

(東本願寺出版)より

## 石西組 同朋大会のご案内

「わたしが

「同朋」として生きていること」

～念仏申し、私の人生を生きる～

講師 谷本修さん(静岡県敬信寺住職)

会場 正萬寺(益田市美都町)

会費 1,500円 弁当代込

日時 2026年6月20日(土)

9:30 受付

10:00 開会

15:30 閉会

申込 専龍寺まで

## 永代経講師 蓮岡修さんの紹介

島根県出身。紛争地・被災地での人道支援活動を経て、2008年より「きんだあらんど」店主となる。大学非常勤講師も務める。

絵本に関する講演を多数行っている。京都市内にある2館の子育て広場代表。全国各地の多くの幼稚園の選書を請け負い、デパートの絵本の催し、

雑誌のコラム掲載など、様々な場で選書を行っています。

僧侶でもあり、良い声で読み語りをします。(きんだあらんどHPより)

専龍寺では、子ども会で、お話を聞きお世話になっております。

## 今月の言葉より

### ウレシパモシリ～互いに互いを育てあう大地～

今月の言葉は、1992年「世界の先住民の国際年にあたり、北海道アイヌ協会の理事長が国連で行った記念演説の一部です。

「アイヌ」とは日本語で人間という意味で、住む場を「アイヌモシリ(人間の静かなる大地)」と言います。

日本という国は、単一の民族であるという考えの発言を今でも聞くことができますが、決してそうではありません。

古代大和国家では、北方の民族を「蝦夷(えみし)」と言い、九州南部の民族を「熊襲(くまそ)・隼人(はやと)」として別民族としています。

違う民族文化を受け入れ共存することがなかったのが、日本の歴史でもあったといえます。

アイヌ民族は、動植物だけでなく火や水などすべての存在をカムイ(神)として、共に生きてきました。

縁あって私は学生の時からおよそ10年間毎年アイヌ民族の方々にお世話になり、教えられ続けました。家庭に泊まり、アイヌの儀式のお手伝いをしたり、子どもと遊んだりする中で、アイヌ民族の優しさと厳しさに出会いました。

仏教で「共(とも)」という心を大事に説かれますが、「共に生きる」「共にくらす」ことがどういうことなのか、その姿を教えていただいたのは、アイヌ民族の姿、アイヌ民族と東本願寺との関係でした。

環境や価値観など、異なるものを受け入れ、理解しあうのは難しいと感じます。しかし暮らしていくということは、異なりと出会いつづけて、今の自分を問われ続けることの繰り返しだと感じます。

### 熾盛(しじょう)

熾盛とは、火が燃え盛る様子をいいます。

阿弥陀仏のすがたは光明熾盛とあらわされ、その願いは、罪悪深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがためと説かれています。

人は、つながりのなか、気づかぬままに、はてしなく罪悪を重ね続け、いまここに生きています。

その存在を悲しみ、慈しみ、寄りそい、ともにあろうとし続けるはたらきを、「阿弥陀」といいます。



専龍寺HP



東本願寺HP

発行日 2026年6月1日

発行者 専龍寺

〒699-3671

島根県益田市津田町561

Tel・fax 0856-27-0020

mail: iwamisenryuji★gmail.com

★は@マーク